

母子相姦のすすめ

母さんの帰宅を待つ僕の元に

時空を超え届けられた不思議な文書

僕の名前はケンゴ。

平日の夕方、看護師のお仕事へ行っている母さん。

時刻は夕方の5時を回っている。

丁度2時間ほど前に学校から帰宅した僕は、二階の自室で母さんの帰宅を首を長くして待っている。

「はあ～～、まだかなあ、母さんっ！」

いつもの母さんの手作り夕ご飯が食べたいからだ。

と、夕暮れの街が見渡せる窓に目をやると少し開いているようだ。わずかに肌をなぞった風で気付いた。

僕は不思議に思った。先ほど確かに閉めた覚えがあったからだ。

開いた部分に何か細長いものが挟まっている。

「んっ??何だっ??」

すぐさま僕は近づき、部屋の内と外と丁度同じくらいの長さの比率で、不安定に敷居のレールに乗って窓の端っこの圧力だけを頼りに挟まっているそれを抜き取る。

すると、

“紙!??”

少し黄ばんだ古紙だ。長年の月日で、熱や酸素にさらされ紙内部の成分が変形しているようだ。

「えっと・・・何だ??」

好奇心に駆られた僕はためらうことなくその紙を広げ、そして書かれてい

た文字を読んだ。

“太古、この国では母と息子が性行為をするのが通常であった。しかし文明の進歩とともにモラル・価値観が大きく変化し、そういった習慣が汚点とみなされるようになり、そして汚れた事実であるそれらの歴史が文明革新の時代に人手によって意図的にほぼ完全なまでに消されてしまった”

その文章を先に読み進めていくにしたがって、

“ビクンッ！！ビクビクッ！！”

自分の中の芯のようなものがひどく痙攣し始める。

文字のその羅列も衝撃的なものだったが、どうやらそれだけが理由ではないようだ。

体が・・・・熱い！！！！

“今こそ、昔では至極当たり前であった濃密且つ激烈で熱い母子相姦を取り戻すべきだ・・・・”

そしてその文章はこう締めくくられていた。

“この文書を、神より選ばれし開拓者に捧ぐ・・・・”

僕は動揺の中で、妙に全身が引き締まるような感覚を覚える。

そして自分自身ではその正体が分からない。

とにかく、とにかく不思議な感覚だったんだ・・・・。

「ただいまあーっ！！」

それからしばらくして一階のリビングへ移動していた僕に、母さんの元気な声がインターフォンの細長い音声穴から届く。

「ああ・・・・母さん・・・・」

僕はどういうわけか、喜びは大きいはずなのにいつものような浮足立った感じではなく落ち着いた足取りで向かう。

「ガチャッ……」

「あっ……た、ただいまぁ！……」

母さんは少し怪訝そうな顔をした。

「んっ？どうしたの？そんな真剣な表情でっ！！？」

「う、ううん……別に大丈夫だよ……」

僕は無意識だった。でも僕の表情は……。

“開拓者としての使命感”

に燃えていたのだと思う……。

僕は母さんにゆっくり微笑んで見せたんだ。

「母さんおかえりっ！！へへっ！！」

「何よー、ちょっとだけビックリしちゃったじゃないっ！！」

その後、僕たちは何事もなかったかのように楽しくお食事をした。

夕食のメニューは定番の野菜たっぷりカレー。いつもと同じ穏やかなひととき。

だけど母さんはその最中もずっと不思議そうだった。

どこか僕に漂う“いつもと違う独特の空気”を察したのかな？？

そして、

「……どうしたの？？やっぱり今日のケンゴ、ちょっと変よ？何かあったんじゃないの？母さんになんでも言ってごらんささいよ。ほら、私たちに隠し事はなしでしょ？？」

ちょっぴり眉を下げて不安そうな母さんに、僕は告げたんだ。

「そうだね……じゃあ言うよ……ちょっと待っててね……」

伝説の文書に書かれていた内容を……。

「太古から、母子相姦っ……！！？？？そ、そんなっ！！？？」

「……これはきっと事実なんだよ」

黄ばんだ皺だらけの古紙を広げ、一緒に見づらい文字列を目で追いながら話す僕たち。

「えっ！！??ほ、本当にっ！？？」

動揺と興奮とで母さんの顔が赤らみ、首筋と首元の鎖骨には瞬く間にたくさん汗の水滴が。

「で、でも……は、母と息子で……！！??」

「うん。母子相姦。僕たちがセックスをするってことだよ
ね……」

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。